

World Scholar's Cup Japan 設立趣旨書

近年、我が国においては、グローバル化への対応の遅れが課題とされています。文部科学省も現状の課題として『今後、グローバル対応を進めていくためには、国際社会における公用語である英語の力はもちろんのこと、ネットワークを形成し、リーダーシップをとるために必要となる交渉力やコミュニケーション能力を有する人材が必要である。』と指摘しています。

米国をはじめとする諸外国においては、数十年前より学外活動（学校のカリキュラム外の活動）が大学入試の審査項目の30%程を占めるほど重視され、関連するプログラムが豊富にあります。例えば、1923年より米国ハーバード大学で始まった模擬国連、90年前より米国で始まったNFLJディーベト・スピーチ大会など、今では世界規模で開催されている大会も多くあります。このように世界中の”エリート予備軍”が集まる大会でお互いに刺激を受け合った生徒、またそのコミュニティーに属することで手に入れることができるグローバルなネットワークを持つ生徒は”優秀な生徒”と見なされ、評価されています。

しかし一方で、日本国内においては、こうした中高生向けのアカデミックかつインスピレーションなプログラムが不足しています。その結果、グローバル社会で必要とされる能力の向上はおろか、その必要性にすら気づくことができないのです。

World Scholar's Cup（略称：WSC）は、アメリカ資本の教材制作会社であるDemidec（代表：Daniel Berdichevsky）が企画、運営している大会で、中高生の総合的な教養を競う大会です。SATやTOEFLなどの教材を制作しているチームが関わる為、質の良いトピックや問題が出題されます。2006年に韓国で始まり、以降世界各国で国内大会が開かれるようになりました。現在では50以上の国で国内大会が開かれており、世界中で2万人近い学生が参加しています。WSC日本大会は2012年に初めて開成高校で開催されました。当時30名であった参加者数は、2016年には300人ほど（東京大会・関西大会総計）にまで成長しました。

WSCのビジョンは包括的、サポータティブ、学際的、ディスカッションベース、未来志向、チーム志向で、異能的である事。WSCは、あらゆるバックグラウンドからくる学生の新たな強みやスキルを見出し、伸ばすことと、将来の世界的な学者やリーダーをグローバルなレベルでインスパイアすることを目的としています。

大会は原則3人1組のチームで使用言語は英語です。科目はスペシャルエリア（毎年変わる特別科目）、科学、歴史、文学、音楽・美術、社会の6教科です。毎年初めに発表される各科目のスタディーガイドに基づいて各自がリサーチをし、ディベート・エッセイ・ペーパーテスト・クイズの4種目の総得点を競います。教養の一つとして、芸術の分野が問われる点はグローバルスタンダードですが、日本の中ではユニークと言えます。

各国で行われる国内大会を勝ち越したチームは、世界大会の参加資格を得ることができます。そこで上位に入ったチームは毎年11月に米国イェール大学で行われる決勝大会に参加することができます。世界における自分のレベルを実感するとともに、世界中にいるライバルの存在に刺激を受ける良い機会です。

大会は、リーダーシップ・交渉力・コミュニケーション能力・クリティカルシンキングスキル・プロアクティブリーダーなどグローバル社会で勝ち抜くためのスキルを参加者にトレーニングさせ、それを実際に世界中のライバルを相手に使うことができる絶好の機会を与えてくれます。

当団体が運営しているWSC日本大会は、数ある各国の国内大会の中でも、唯一中高生を中心に大会を企画・運営しており、アメリカ本部との調整も、実行委員が実施・交渉しています。実行委員は大会を通して一人一人が自主的に動き、参加者が安心して大会に臨める体制をつくりあげてきました。

当団体は説明会等も積極的に行い、FacebookなどのSNSを通じてWSCの魅力を発信してきましたが、知名度はまだまだ高いとは言えず、国内での知名度の向上、また、安全に大きな大会を開催して、より多くの人に参加できる大会にするための活動費の取得、それに伴う金銭の管理方法や、実行委員の活動を明確にする等の課題があり、これらの課題を解消し、大会の質を向上させるためにはNPO法人格を取得することが必要であると考え、このたび設立することにいたしました。